

病と健康をめぐる

中野重行 ニンゲン学



中野重行 大分大学名誉教授
なかの・しげゆき 1965年、岡山大学医学部卒業。89年、大分医科大学(現大分大学医学部)教授に就任。2003年から3年間同大学病院院長を務める。専門は臨床薬理学、心身医学。現在は同大学医学部創薬育薬医療コミュニケーション講座客員教授。著書は「これからのクスリとの付き合い方と薬の育て方」など多数。

現代を生きる私たちに、
これからの行動目標
にしたい新しいコンセプト
(概念)「やわらかな1・5人稱」を紹介し
ます。

「やわらかな1・5人稱」という言葉は、一人稱の「わたし」と二人稱の「あなた」の間を、自由に行き来できるイメージを大事にしたものです。自分自身は「一人稱」ですが、自分から見ると「二人稱」である「あなた」との間で、自分の心を自由に行ったり来たりできる、平均すると1・5人稱になるような柔らかな姿勢や態度のことで

医師は、目の前の患者(あなた)の診断と治療について、できるだけ論理的に考えて、
「わたし」と二人稱の「あなた」の間を、自由に行き来できるイメージを大事にしたものです。自分自身は「一人稱」ですが、自分から見ると「二人稱」である「あなた」との間で、自分の心を自由に行ったり来たりできる、平均すると1・5人稱になるような柔らかな姿勢や態度のことで

口として求められる一人稱としての「疾患モード」を使いながらも、医師から見ると二人稱で語られる「病

やわらかな1・5人稱

意識してストレス軽減

にできることで、意識してトレーニングすると身に付けることができます。人間関係を良くするだけでなく、ストレスの軽減にも役立つコンセプトなのです。

イメージを頭の中に持っているだけで、生きていく姿勢に変化が生まれるものです。心に留めておきたいコンセプトとして、皆さんにお薦めしたいと思いま

「やわらかな1・5人稱」というコンセプトは、十数年前に全国的に導入された臨床研究コーディネーター(CRC)の研修会で、私の頭の中にイメージだけ

「やわらかな1・5人稱」は、モードの切り替えを時や場所、状況に応じて柔軟

る「インフォームドコンセント」のやり方を学ぶ参加体験型学習の指導をしていた時でした。
その後、2001年から大分医科大学(現大分大学医学部)で、医学部に医療コミュニケーションの教育を行うための模擬患者の養成を兼ねたワークショップを始め、「豊の国医療コミュニケーションの集い」と名付けました。間もなくこのワークショップの場で「やわらかな1・5人稱」というコンセプトが生まれるのです。

評論家の柳田邦男の著作に「乾いた3人稱より、潤いのある2・5人稱」という表現が出てきます。柳田は、脳死について「三人稱」(あの人が、患者が)のスキャンズで執筆していました。息子が脳死になるといふ悲劇に出合いました。息子の

「やわらかな1・5人稱」は、モードの切り替えを時や場所、状況に応じて柔軟

随時掲載